

月の花挽歌 ～12. 末摘花～

12-4

彩の勧めで、真紀は8月に入るとすぐに帰省することになった。

月山の夏スキーは7月の中旬に閉山していたので、家業の旅館もひと区切りついたこともあって、父も義母もゆったりとした気分で娘を迎えてくれた。

久しぶりに父とチェスを指すこともできたし、夫婦仲の良さもじんわりと感じ取れたり、モヤモヤはさておき、曲がりなりにも骨休めをすることができた。

その年、1984年の8月は猛暑日が続いた。

1週間ばかりのんびりした真紀は、夏休み明けに開催される高校の山東祭（文化祭）に参加する演劇部の級友と約束していた書き割り制作の手伝いがあったので、父の車で送ってもらうことになった。

1時間足らずのドライブであったが、伯母の過去を気にせざるを得なくなっていた真紀は、新潟市内でカクテルバーとして有名だったマスターの下で、当時は珍しかった女性バーテンダーとして修業していた二十歳そこそこの伯母が、妻子持ちで年の離れたマスターと恋仲になってしまったことや、名バーテンダー以外に名うてのバイカーだったマスターが米国のルート66をツーリング中に事故死したことなどを運転中の父から聞き出した。

どこか頼りない情報だつたけれど、今にも切れそうな糸を手繰り寄せた真紀は、伯母の過去と現在が繋がるイメージをどうにか思い描くことができた。

開放感が気持ちいい居間で、小一時間ほど義姉と世間話をして父は帰って行った。

その夜、7時を回った頃だった。自室で本を読んでいた真紀を呼ぶ伯母の声がした。

『バー末摘花』がオープンする時間帯だったせいで、彩の佇まいや顔ごしらは、真紀にとって見知らぬ世界だったけれど、時節柄、真夏の夜の夢の案内人を彷彿とさせた。

「紹介したい方がいるので、身繕いしてお店に来てちょうだい」と彩が抵抗感なく言う。

「お店にですか？」と真紀は驚いて訊いた。

「そうよ。来れば分かるから」と彩は事情を説明もしないで、あとは自分で決めなさいと言わんばかりに行ってしまった。

伯母の口振りから推して、顔を出さざるを得ないと思った真紀は、高校に入ってから覚えたメイクを施すと、裏口から入らずに敢えて客と同じようにバーの重厚なオーク材のドアを押した。

夜の『バー末摘花』に入るのは初めてなので気持ちに余裕はなかったが、いざ入ってしまうと妙に落ち着いている自分がいた。